

スポーツ科学系科目の学外での活動によるアクティブラーニングの可能性 - 学生の身体活動と健康への関心を高める方策を考える -

研究代表者	河合 美香(法 学 部)
共同研究者	橋本 雅子(短期大学部)
	松畑 尚子(法 学 部)
	新野 守 (非常勤講師)
	金 尚憲(非常勤講師)

【研究の背景】

近年、個性化し、多様化する学生に対し、知識を教授する従来の「教員中心の教育」から「学生中心の教育」への視点の転換に伴う正課外教育の必要性が指摘されるようになってきている（大学における学生生活の充実方策について－学生の立場に立った大学づくりを目指して－、2000年文部科学省）。以降、それまで正課教育を補完するものとして考えられてきた正課外教育の意義が捉え直されるようになり、正課教育と正課外教育の双方の教育の中で、学生が社会との接点を持つ機会を多く与え、また、学生の自主的な活動等への支援により、各大学の理念や教育目標を踏まえ、複雑化し、価値観が多様化した社会に対応するための基本的な能力の涵養に努めることが求められるようになってきている。

一方、本学のスポーツ科学系では、現在、以下の2点を骨子として、カリキュラムを編成している。

（カリキュラム編成の骨子）

1. 現代社会における人々の健康状態や余暇状況をふまえ、スポーツについての理解とその合理的な実践方法の学習をとおして生涯にわたる健康で文化的な生活の基礎を築く。
2. 文化としてのスポーツに対する理解を促し、現代社会におけるスポーツの役割や人間の身体がもつ可能性について考える。

スポーツ科学系では、以上のカリキュラム編成の骨子を基盤として、スポーツと健康に関する『講義科目』（「健康とスポーツ」と「人間とスポーツ」、「現代社会とスポーツ」など）と身体運動を伴う『演習科目』（スポーツ技術学演習：バスケットボール、バレーボール、テニス、バドミントン、卓球、フィットネス）を2本の柱として展開している。また、スポーツ科学系で展開されている科目は、「スポーツ科学最前線」を除いていずれも教員免許の取得に必要な「体育」の選択必修科目の対象とされている。

しかし、2015年教養教育FD研究開発プロジェクト研究による調査結果によれば、講義科目を履修している学生の身体活動の状況は、総じて良好ではない傾向にあった。2012～2015年に「スポーツ技術学演習」の履修全学生を対象に実施した「スポーツ技術学演習履修の動向調査」によれば、学生の科目履修の目的は、「専門的なスポーツ技術の獲得」よりも「身体を動かしたい、運動が好きだから」と「健康維持・体力の向上のため」、「運動不足解消のため」の他、「ストレスの解消、気晴らしのため」、「友人・仲間との交流のため」など、身体活動以外にもあり、多岐にわたっている。

また、スポーツ科学系の講義と演習のいずれもの科目も学部や学生の数に対して現在、開講されている科目や開講数、曜講数が少ないことから、履修を希望しながら履修できない学生も多いという課題もある。

これらの現状から、スポーツ科学系の科目履修の学生において、下記の課題が考えられる。

（課 題）

1. 学生の身体活動の状況を把握し、課題に対する方策を講じる必要がある

2. スポーツ科学系科目として、「健康維持・体力の向上」、「運動不足解消」、「ストレスの解消、気晴らし」、「友人・仲間との交流」の内容を包括する講義や演習の増設、または現存する科目の内容の改善が必要である
3. スポーツ科学系科目の履修希望者の履修を可能とする対策を講じる必要がある

【研究の目的】

社会的な変化に伴う、全国的な大学教育の動向、また本学における現状と課題を講じる際、正課教育におけるカリキュラム、および授業内容の検討に加え、正課外教育の可能性についての検討も必要である。すなわち、正課の他に、地域や行政、およびNPO組織等と連携し、スポーツ・健康に関する活動に学生が関わる（アクティブラーニング）ことで、社会との接点を持ち、スポーツ・健康について広い視野から考え、行動する機会となることが期待される。

本研究では、学生が現在の正課の授業に加え、スポーツ・健康に関するイベントや教室等への視察、企画・参画、サポートなどの活動に関わる機会を促し、これがスポーツと健康に関する社会的問題や可能性について考え、学生が自らの身体活動の状況を良好にする機会となり得るか否か、今後の正課外教育の可能性について検討することを目的とした。

以下、検討の対象としたスポーツ・健康に関するイベントや教室等への視察、企画・参画、サポートなど、活動内容を報告する。

【報告】

1. チャリティースポーツイベントの視察

2016年5月22日（日）、京都市内の鴨川沿いに位置する鴨川公園を発着点として、2016年度全国YMCAチャリティーラン（個人レースと駅伝）が開催された。著者（河合）はこの大会と運営を視察、また、大会実行委員と情報交換した。

本大会は、有森裕子氏（YMCAインターナショナル・チャリティーラン理事長、バルセロナ・アトランタ五輪マラソンメダリスト）が、障がいのある子どもたちを応援するためのイベントであり、障がいのある子どもたちとそうでない子どもたちが共に幸せに生きていける社会をめざして開催されている。

本イベントに参加するチームのメンバー構成は、走力、年齢等、多様であり、大会参加費はYMCAが全国で展開する障がい児プログラムに寄付されている。イベントへの参加が社会貢献の一翼を担っているのである。

スタート・ゴール地点となった鴨川公園では、身体のケアのために鍼灸師が参加者をサポートし、学生がダンスや演奏を披露して大会を盛り上げて待機している選手や応援の人を和ませていた。

<アクティブラーニングの可能性>

スポーツイベントには、「実践する、参加する」に加え、「応援する」、「支える」、「盛り上げる」など、学生には多様な関わりが可能である。また、イベントへの参加が、間接的に寄付の手段の一つとなり得る、その仕組みを理解する機会ともなった。

本イベントへの参画を今後の授業内での取り組み、または正課外活動として検討する。



チャリティーランの大会の様子

2. ニュースポーツ「太極柔力球」の体験

2016年6月23日（木）、体育館にて展開している教養教育科目「スポーツ技術学演習（フィットネス）」の授業にて、NPO 法人日本太極柔力球連盟代表理事の鄒力氏により、「太極柔力球」について、その伝来と実践による効果、方法を教授いただき、体験する機会をつくった。

「太極柔力球」は、ラケットとボールを用い、優雅でありながらも筋肉や呼吸循環器系を刺激する太極拳と気功の特性を取り入れた中国伝来のスポーツである。音楽に合わせ、美しい衣装を着用して演じる「演舞」とコートでネットを挟んで得点を競う「競技」の2つの種目の展開が可能であることから、年代や体力に合わせた実践が可能である。近年では、特に少子高齢化が深刻である中国において、国家の健康づくり政策として取り組まれている運動の一つである。

授業で「太極柔力球」を実践した学生は、初めて見るラケットとボール、また扱い方に悪戦苦闘していたが、遠心力を利用した振り子運動や回旋、回転運動など、全身と局所の運動を繰り返した。また、鄒力氏の演舞を鑑賞した際は、その優雅な動きに見入っていた。

「太極柔力球」は、健康づくりへの効果が期待されることから、鄒力氏には、2015年度より、本学の地域貢献事業 REC コミュニティーカレッジ「くらしと健康」の講座『太極柔力球で優雅に健康づくり！』も担当いただき、地域の健康づくりに尽力いただいている。2017年1月19日（木）の REC 第3回講座では、学生の有志が講座の参加者の様子を見学した。REC の参加者の平均年齢は70歳を越えると推定されたが、みな姿勢が良く、動きは機敏、かつ柔軟であった。鄒力氏より感想を求められた学生は、「動きが柔らかくてきれい」、「もっと練習したい」などと述べていた。



「太極柔力球」を授業で初めての体験



「演舞」を披露する鄒力氏

<調査の実施>

「太極柔力球」を体験した「スポーツ技術学演習（フィットネス）」の履修学生に対し、今後、本学の地域連携による健康づくり政策の構築、また学生のアクティブラーニングによる事業への企画、および参画を検討するための基礎資料の収集を目的として、調査を実施した。調査票は授業5クラスの登録履修生145名中の121名から回収された（回答率は83.4%）。

結果を表1に示した。

「体力が必要である」の割合よりも「技術が難しい」の割合が高い様子にあった。また、ゆったりとした動きでありながらも予想以上に体力が必要とされることから「運動不足解消になった」の割合が高かった。また、「楽しい」、「機会があれば今後もやってみたい」の割合も高かった。しかし、「友人・知人にも勧めたい」の割合は高くなかった。この要因については検討が必要である。

<アクティブラーニングの可能性>

「太極柔力球」は、履修学生すべてが未体験であり、性別や年齢に関係なく実践可能であ

った。また、体力とともにラケットの扱い方や回旋・回転など、技術が多様にある一方で、太極拳を応用したゆったりした動きにより、全身、また局所の筋肉や呼吸循環器系を刺激することから、健康づくりのための運動として有効であると考えられた。特に「演舞」は、音楽を用い、美しい衣装を着用して実施することから、女性には魅力的に感じられるようであったことから、運動嫌い、また体力のない女子学生への有効性が示唆された。

また、地域貢献として REC の講座が体育館内で展開されていることは、地域住民と学生の接点をつくる上で好都合である。今後の授業の中での取り組み、または正課外活動の可能性を検討する。

表 1. 太極柔力球実践のよる効果

実践結果		全くそうではない		あまりそうではない		ある程度そうだ		全くその通りだ		合計
1) 技術が難しかった										
男性	人数(%)	8	15.1%	17	32.1%	20	37.7%	8	15.1%	53
女性	人数(%)	6	8.8%	12	17.6%	36	52.9%	14	20.6%	68
合計	人数(%)	14	11.6%	29	24.0%	56	46.3%	22	18.2%	121
2) 体力が必要であった										
男性	人数(%)	10	18.9%	23	43.4%	12	22.6%	8	15.1%	53
女性	人数(%)	5	7.5%	28	41.8%	28	41.8%	6	9.0%	67
合計	人数(%)	15	12.5%	51	42.5%	40	33.3%	14	11.7%	120
3) 運動不足の解消になった										
男性	人数(%)	2	3.8%	14	26.4%	27	50.9%	10	18.9%	53
女性	人数(%)	2	2.9%	13	19.1%	36	52.9%	17	25.0%	68
合計	人数(%)	4	3.3%	27	22.3%	63	52.1%	27	22.3%	121
4) ストレスの解消になった										
男性	人数(%)	3	5.7%	18	34.0%	21	39.6%	11	20.8%	53
女性	人数(%)	2	2.9%	20	29.4%	33	48.5%	13	19.1%	68
合計	人数(%)	5	4.1%	38	31.4%	54	44.6%	24	19.8%	121
5) 身体の柔軟性が高まった										
男性	人数(%)	6	11.5%	18	34.6%	22	42.3%	6	11.5%	52
女性	人数(%)	2	2.9%	22	32.4%	32	47.1%	12	17.6%	68
合計	人数(%)	8	6.7%	40	33.3%	54	45.0%	18	15.0%	120
6) 楽しかった										
男性	人数(%)	3	5.7%	3	5.7%	24	45.3%	23	43.4%	53
女性	人数(%)	0	0.0%	9	13.2%	30	44.1%	29	42.6%	68
合計	人数(%)	3	2.5%	12	9.9%	54	44.6%	52	43.0%	121
7) コミュニケーションの機会になった										
男性	人数(%)	2	3.8%	9	17.0%	22	41.5%	20	37.7%	53
女性	人数(%)	0	0.0%	12	17.9%	32	47.8%	23	34.3%	67
合計	人数(%)	2	1.7%	21	17.5%	54	45.0%	43	35.8%	120
8) 機会があれば今後もやってみたい										
男性	人数(%)	4	7.5%	10	18.9%	26	49.1%	13	24.5%	53
女性	人数(%)	2	3.0%	17	25.4%	31	46.3%	17	25.4%	67
合計	人数(%)	6	5.0%	27	22.5%	57	47.5%	30	25.0%	120
9) 友人・知人にも勧めたい										
男性	人数(%)	4	7.5%	16	30.2%	20	37.7%	13	24.5%	53
女性	人数(%)	3	4.4%	21	30.9%	29	42.6%	15	22.1%	68
合計	人数(%)	7	5.8%	37	30.6%	49	40.5%	28	23.1%	121

3. 小学生対象のスポーツキャンプへの参画

2016年8月1日～4日(3泊4日)、滋賀県守山市に位置するSGホールディングによる「キッズスポーツキャンプ in 滋賀」が開催された。

本企画は、著者がかつて所属していた実業団ランニングクラブ(リクルートランニングクラブ)の元同僚有森裕子氏(パロセロナ五輪、アトランタ五輪女子マラソンメダリスト)が設立しているRIGHT,のマネジメントによる事業であり、今年度で13年目となる。元トップアスリート、および指導者等、スタッフが行政、企業、および大学と連携して発育発達期にある小学生を多角的にサポートする産官学民事業でもある。

本企画の概要は、以下のとおりである(RIGHT,提供資料より抜粋)。

●ねらい

「今日の高度情報化社会で、人々の生活は飛躍的に進化し、同時にコミュニケーションの方法も劇的に変化しています。一方で子供を取り巻く環境は、一人っ子の家庭が増え、外で遊ぶ時間が減少している事などが理由で、人と人とのコミュニケーションや、普段の生活の中での実体験が不足し、「社会性」が身につくづらくなっています。キッズ・スポーツ体験キャンプの核であるスポーツプログラムは、【競争】【ルール】【チームワーク】といった社会性を育むのに必要不可欠な要素で構成されています。また、スポーツはもとより、アウトドア、健康、アート、障害者、語学、食育、防災、救命など各方面からのサポートで実現させていきます。」

●講師

有森裕子（陸上）、宇津木妙子（ソフトボール）、大山加奈（バレーボール）、望月聡（サッカー）、滋賀レイクスターズ（バスケット）、日本ブラインドサッカー協会（ブラインドサッカー）、SGホールディングスグループ陸上競技部（陸上）、SGホールディングスグループソフトボール部（ソフトボール）、河合美香（スポーツ栄養専門）

●協賛企業

SGホールディングス株式会社

●後援

滋賀県教育委員会、滋賀県教育委員会、公益財団法人 滋賀県体育協会、守山市教育委員会、守山市教育委員会、守山市体育協会

RIGHT,より、本学学生に対して「キッズスポーツキャンプ in 滋賀」への参画が期待、要請されたことから、アクティブラーニングの可能性を検討するために、本企画への学生の参画を試みた。なお、産官学民の（学）では、本学の他、滋賀県下にある立命館大学とびわこ成蹊スポーツ大学のスポーツ系の学生も対象とされた。

本学では、RECにて「キッズスポーツキャンプ in 滋賀」を産官学民による地域貢献活動と位置づけ、学生の参画を試みることにし、事前準備や保険、また参画するに伴う費用等について打ち合わせ、学内関係教職員の協力の下、4名の学生が参画した。

参画した学生は、小学生の発育発達を配慮した生活全般のサポートやコミュニケーションの難しさなど、多大な刺激を受けていた。また、13年目になるこのキッズスポーツキャンプの企画や広報、運営面においても RIGHT, のスタッフ他、他大学の学生との情報交換し、貴重な経験となったようである。



また、「キッズスポーツキャンプ in 滋賀」の最終日に参加小学生を迎えに来た保護者に対し、「食育トーク」の時間が設けられ、有森氏と著者が発育発達期の子どもたちの食環境や食習慣の重要性について理論と課題を紹介した。主催者によれば、例年以上に保護者の参加が多かったとのことで、開催地における保護者の食と健康に対する関心の高さが伺われた。

＜アクティブラーニングの可能性＞

本企画の開催時期が、大学の前期定期試験の日程と重なり、RIGHT, から前提とされた「全日程の参画」は本学の学生には困難であった。また学生の参画への要請の時期が遅く、学生の募集に広報の時間が不足したことから「全日程の参画」は難しかった。これは、他の2つの大学においても同様の状況にあり、本学



キッズスポーツキャンプ in 滋賀の様子

学生の参画は全プログラムの中の一部となった。今後、本企画への参画を教養教育科目授業の一環として、または学生のインターンシップとして位置づけることができれば、貴重、かつ有意義な機会となる。また、食育に関するプログラムの考案の可能性も示唆された。

今後、本企画のカリキュラムへの導入が可能か否か、また、可能な場合はどのような位置づけが有効か、検討する。

4. 健康づくりに関する公開講演会の企画・開催

2016年11月2日(水)、金哲彦氏(NPO法人日本ランナーズ理事長、プロマラソンコーチとして出演)による公開講演会『金哲彦のランニング健康学～スポーツを通じた人づくりとまちづくり』を企画、開催した。

企画に先立ち、学内関係者の協力を得て、本学が位置する京都市、および伏見区役所との連携、また今後の健康づくり政策の可能性について検討した。行政との共催は見送られたが、健康づくりに関係する行政と学会、地域のランニング連合会、また京都新聞社より後援を得た。企画と広報、運営には一部、学生も関わった。

金哲彦氏の講演の内容は、年齢を問わず、運動は身体的、精神的にも健康づくりに貢献すること、ランニングイベントによる人づくりとまちづくりの可能性、また、現在のランニングブームへの懸念についてであった。

講演会の後半は、著者ととともにパネルディスカッションを行い、過度なランニングによる弊害とトレーニング以外の身体の必要性についても言及した。

講演は、学生や教職員の健康づくりに加え、地域連携など、多様な可能性を示唆するものであった。また、行政からの参加もあったことから、今後、地域における健康づくり政策の連携を考える貴重な機会ともなった。



学内者、および地域住民を前に公開講演の様子

<調査の実施>

講演会の参加者に対し、今後、本学の地域連携による健康づくり政策の構築、また学生のアクティブラーニングによる事業への企画、および参画を検討するための基礎資料の収集を目的として、調査を実施した。調査票は参加者のうち210名から回収された。

結果の概要を以下に示した。

①参加者の状況

参加者の年代と住まいをそれぞれ、表2と表3に示した。

表2. 参加者の年代

性別		年代							合計
		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	
男性	人数	21	59	4	8	12	24	7	135
	(%)	15.6%	43.7%	3.0%	5.9%	8.9%	17.8%	5.2%	100.0%
女性	人数	13	37	3	4	7	5	5	74
	(%)	17.6%	50.0%	4.1%	5.4%	9.5%	6.8%	6.8%	100.0%
合計	人数	34	96	7	12	19	29	12	209
	(%)	16.3%	45.9%	3.3%	5.7%	9.1%	13.9%	5.7%	100.0%

表3. 参加者の住まい

性別		住まい			合計
		京都市	京都市外の京都府	京都府外	
男性	(%)	52	24	59	135
	人数	38.5%	17.8%	43.7%	100.0%
女性	(%)	34	6	34	74
	人数	45.9%	8.1%	45.9%	100.0%
合計	(%)	86	30	93	209
	人数	41.1%	14.4%	44.5%	100.0%

参加者は10代～20代が多く、続いて60代が多かった。公開講演会を平日の夕刻（17時～19時）に開催したことから、本学学生の参加は容易であったが、本学教職員、また学外の就業者の参加は難しかったと推察された。一般の参加は60代、また近隣の伏見区の参加割合が高かった。

②年代と運動の実施状況

参加者の運動実施状況を表4に示した。

年代と運動実施の状況には年代による相違がある様子にあった。

表4. 参加者の運動実施状況

年代		運動実施状況					合計	
		ほとんど毎日	週3日以上	週3日未満	最近始めた	近々始める		運動するつもりはない
10代	人数	10	3	5	3	6	7	34
	(%)	29.4%	8.8%	14.7%	8.8%	17.6%	20.6%	100.0%
20代	人数	20	6	25	1	18	25	95
	(%)	21.1%	6.3%	26.3%	1.1%	18.9%	26.3%	100.0%
30代	人数	0	3	3	0	1	0	7
	(%)	0.0%	42.9%	42.9%	0.0%	14.3%	0.0%	100.0%
40代	人数	3	4	3	0	2	0	12
	(%)	25.0%	33.3%	25.0%	0.0%	16.7%	0.0%	100.0%
50代	人数	5	7	6	1	0	1	20
	(%)	25.0%	35.0%	30.0%	5.0%	0.0%	5.0%	100.0%
60代	人数	7	13	7	0	1	0	28
	(%)	25.0%	46.4%	25.0%	0.0%	3.6%	0.0%	100.0%
70代	人数	0	6	4	0	1	1	12
	(%)	0.0%	50.0%	33.3%	0.0%	8.3%	8.3%	100.0%
合計	人数	45	42	53	5	29	34	208
	(%)	21.6%	20.2%	25.5%	2.4%	13.9%	16.3%	100.0%

③運動の実施状況とその阻害要因

運動の実施状況と運動を阻害する要因について表5に示した。

「時間がない」と「お金がない」、「仲間がいない」、「運動の方法がわからない」、さらに「そもそも運動が嫌い」が、運動実施の阻害要因となっていた。

表5. 運動の実施状況と運動を阻害する要因

要因	ほとんど毎日		週3日以上		週3日未満		最近始めた		近々始める		運動するつもりはない		合計		有意差
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
時間がない	12	26.7%	14	33.3%	29	54.7%	2	40.0%	21	72.4%	25	73.5%	103	49.5%	p<0.001
お金がない	2	4.4%	2	4.8%	12	22.6%	1	20.0%	9	31.0%	6	17.6%	32	15.4%	p<0.01
施設がない	4	8.9%	6	14.3%	11	20.8%	1	20.0%	4	13.8%	8	23.5%	34	16.3%	n.s.
用具がない	1	2.2%	4	9.5%	6	11.3%	0	0.0%	6	20.7%	6	17.6%	23	11.1%	n.s.
仲間がいない	2	4.4%	1	2.4%	4	7.5%	4	80.0%	6	20.7%	5	14.7%	22	10.6%	p<0.001
疲労がある	11	24.4%	6	14.3%	9	17.0%	0	0.0%	8	27.6%	7	20.6%	41	19.7%	n.s.
方法がわからない	3	6.7%	0	0.0%	3	5.7%	2	40.0%	8	27.6%	3	8.8%	19	9.1%	p<0.001
運動できない怪我がある	1	2.2%	4	9.5%	2	3.8%	0	0.0%	1	3.4%	0	0.0%	8	3.8%	n.s.
運動できない病気がある	2	4.4%	1	2.4%	3	5.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	2.9%	7	3.4%	n.s.
そもそも運動が嫌い	3	6.7%	1	2.4%	4	7.5%	1	20.0%	1	3.4%	8	23.5%	18	8.7%	p<0.05
運動する必要性を感じない	0	0.0%	1	2.4%	1	1.9%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	1.0%	n.s.
その他	2	4.4%	1	2.4%	5	9.4%	0	0.0%	1	3.4%	2	5.9%	11	5.3%	n.s.

<アクティブラーニングの可能性>

本公開講座は、スポーツ科学系の授業において、今後、スポーツ・健康関連行政や組織等と協同して地域の健康づくりに貢献することを念頭に、その可能性を検討するためのスタートアップと位置づけて企画した。

講演は、ランニングが健康づくりのみならず、人づくりやまちづくりの可能性を有することについて、考える貴重な機会となった。また、講演後に近隣のスポーツ・健康関連の行政職員やランニングの他、サッカーや剣道など、各種競技団体の関係者との懇談の機会を設けた。組織を越えた情報交換により、今後の各組織のスポーツ・健康関連の企画と学生の連携が期待される。

一方、公開講座の企画、開催に当たり、①募集対象者の設定と募集日程、②近隣地域(行政)との連携、③広報誌の作成と学内教職員への広報、および学外メディア等への広報、④会場の収容人数と募集締め切りのタイミング等、課題もあった。学内組織との連絡・調整、分担、および進捗状況の確認などを明確することで、より一層の効果が期待できる。これらは今後の企画・開催の際の課題としたい。

5. 障がい者による講演と情報交換

2017年1月11日(水)、本学3号館202教室にて、任意団体「馬っ子の会」主宰の山下泰三氏(うまのおっちゃん:心と体の不自由な人の応援人)と奥様の美恵子氏より「障がいとスポーツ:馬が孤立を救ってくれた」をテーマに講演いただいた。

山下氏は、働き盛りの40代に網膜色素変性症という難病に罹ったが、失意のどん底にあった時に馬と出会い、人生の決意を新たにされた。その後、ピアカウンセラーの資格を取得し、現在は、「馬っ子の会」にて発達障害の子ども達とその家族をホースセラピーによりサポートしている。

講演に先立ち、「人間とスポーツ」の授業内で、山下氏をモデルとしたTBS製作(2011年)のDVD「いきものがたり(クレールと見る明日)」を視聴し、山下氏の現状に至るまでのプロセス、また障がい者とスポーツの基礎知識を得た。



山下泰三氏の講演の様子

講演では、山下氏の馬との出会いによる人生の転機、また現在の発達障害の子どもたちへの活動について紹介いただき、その後、学生と質疑応答した。講演会には、本学の障がい者支援センター他、学内で障がい者との関わりをもつ職員も参加した。

講演後は、ボランティア・NPO活動センターを訪問し、職員とセンターの学生スタッフでセンターの活動と山下夫妻の発達障害の子どもたちを対象とした活動について、情報交換した。

<アクティブラーニングの可能性>

講演後半に山下氏と学生との質疑応答の機会をつくった。学生は身近なところで障がい者との関わりが増加している様子にあった。事前授業で「健康とは何か」をテーマに意見交換していたが、山下氏の失意からの復帰と現在の活動は、学生の障がい者との関わりに加え、学生自身の現在の生活について考える貴重な機会となったようであった。

今後は、ボランティア・NPO活動センター、また障がい者支援センターとの協働し、アクティブラーニングとしての学生の障がい者への理解、また活動を検討していきたい。

【まとめ】

スポーツ科学系科目におけるアクティブラーニングの可能性について、5つのイベント等の視察と企画・参画等から検討した。正課外教育によるアクティブラーニング可能性は多様にあり、またアクティブラーニングにより、スポーツ・健康への理解が深まり、実践の可能性が高まることが示唆された。

今後、スポーツ科学系の授業において、学生を正課外活動に誘うとともにアクティブラーニングのカリキュラムへの位置づけについて検討していきたい。